

教育のデータベース化

——教育の成果はいつ出るのか？

「結果」を提示するのが最も難しい学問領域のひとつに、「教育」がある。教え方、その手法が、どんな結果・成果を導き出すのか——ある物質になんらかの刺激を与え、化学反応を起こさせる。そしてその結果は……。そうはいかないのが教育である。何をもちて教育の成果とするのか、いったいどの時点で測るのか、それらを特定するのは難しい。「これが正しい」という測定手法があるわけでもない。

たとえば大学における外国語教育の成果をどうみるか？

大学入学後にはじめて学ぶ外国語の場合、在学中に、スキルとして十分に使いこなすまでのレベルに達することはかなり難しい。私の勤務する大学キャンパスでは、外国語教育に関し、独自の教授法とカリキュラムを開発・運用し、高い教育実績をあげることを目指してきた。しかし、この「独自の」教授法がほんとうに効果をあげているのか、果たして成功したといえるのか、まだ誰も本当のところを答えることができていない。「データ」の収集蓄積がない。ここでいう「データ」とは「人」である。「人」が学習した言語とどのように関わって生きていくのか、その関わりを示すデータである。

近年、かつて習得した言語が、仕事や生活、趣味などで形になってみえてくるには、少なくとも卒業後10年から15年を要する、ということが言われている。しかし、あくまでも、多分そうであろう、という言い方であり、統計等に裏付けられたものではない。

在学中の成績や活動記録はのこっている。どんな専門分野でレポートを書いたのか、どんなゼミに所属していたのか、そういった記録である。外国語の教育効果を論じるとき、必要なのは、学生が卒業後にどのような軌跡を辿っているのか、大学時代に勉強した外国語とどんな関わりを持っているのか、といったデータである。卒業後の外国語との関わりは、人それぞれであり、多様である。卒業後すぐに就いた仕事は外国語と全く関わりがなかったかもしれない。しかしその先の人生について、確かなものを多く語ることは難しい。思ってもみなかったことが待ち受けているかもしれない。海外へのいきなりの転勤、転職、あるいは強い関心・興味を持ったものが、外

青山藤雄さんの情報の編集	
名前: 青山藤雄	Name: Aoyama Fujio
名前(ローマ字表記):	Name (english):
メールアドレス: fujoaoyama@stc.keio.ac.	Mail address: fujoaoyama@...
パスワード: *****	Password: *****
学部: 総合政策	Faculty: Policy Management
学年: 卒業	Year: graduate
出身高校: 青山高校	High school: Aoyama High School
学籍番号: 19481272	Student number: 19481272
ドイツ語履修クラス名: その他(下のテキストボックスに授業名を入力してください)	German class: ---
「その他」の時の授業名:	Post code: ---
郵便番号:	Address: ---
住所:	Phone number: ---
電話番号:	Mother Language 1: Japanese
	Mother language 2: ---
母語1: 日本語	Work content and location: broadcast, director
母語2:	Language used at work: Jap., Eng. sometimes German
仕事の内容および勤務先・勤務地: 放送、番組制作、米国管テレ	Language used in daily life: Japanese
仕事で使用する言語およびその場面: 日本語、英語、たまにドイツ	Involvement with German: at work
日常生活で使う言語およびその場面: 日本語	Other (club, hobby etc.): music, movie, tennis
現在のドイツ語とかがわり: 仕事で使う	Update, cancel
その他(サークル、趣味など):	音楽、映画、テニス

ドイツ語教育成果データベースの一部例

国との関わりをもっていたり、等等。

現在、私の教育分野であるドイツ語教育に調査対象を絞り、データベースの構築をすすめている。外国語教育研究者とデータベース構築を専門とする研究者との共同研究である。それぞれの学習者がどんな学習履歴を持つのか、どんな場面で外国語と関わりをもつのか、既習言語がどんな状況で活かされているのか。レベルの変化、専門領域の変化等、想定される状況をデータとして蓄積できるようにシステムを設計した。分析作業のためには、データの蓄積がまだまだ十分ではない。多くの時間と労力を必要とする。しかし、教育機関がその役割と責任を考えたとき、教育の効果・成果についての検討を避けることはできない。大学は、あるいは教育は、人それぞれのあり方にいかに関わっているのか、いけるのか。

膨大なデータ集積の中に、元気な卒業生の顔を見ることができたら、こんなにうれしいことはない。

(わらかい いくみ・ドイツ文学)